

第 28 回国際協力セミナー

「危機の時代に - 難民支援現場の視点から今後の日本と世界を考える」

セミナー概要

日時：2011 年 6 月 6 日（月）18:30-20:30

場所：東京大学 柏キャンパス 環境棟 7F 講義室

参加者：42 名

講師：千田悦子（国連難民高等弁務官駐日事務所 総務・経理担当官）

講師略歴：京都府生まれ。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業後、(特活)日本国際ボランティアセンター（JVC）ソマリアでボランティア。その後、専門学校講師職員を勤め、青年海外協力隊として西サモアに赴任。ボストン大学医学部公衆衛生修士号および、ハワイ大学ソーシャルワーク修士号を取得。ハワイ州政府社会福祉課児童保護局で（虐待児童及びその家族の）ケースワーカー勤務後、1996 年より UNHCR 勤務。

講演内容の概略

難民キャンプの現場について、当時の様子を語ってくださった。その上で、東日本大震災での活動や今後の日本の在り方など、学生が考えるべき事柄について、講演と懇親会を通して、講師と話し合うことができた。

キャリアパス

京都生まれ。その頃は京都にまだ部落の存在が残っていた。幼い頃おばあちゃんに「あなたの髪の毛がまっすぐだったらもっと可愛かったのに」と言われ、「私は髪の毛がちぢれているから日本人グループからは外れるんだ」と仲間はずれの気分を感じた。そんな時にアフリカのポスターを見て「アフリカ人はみんな髪がちぢれているから差別されないに違いない」と感じ、アフリカに行って働きたいと思うようになった。

当初は、医者になれば無医村で働けると考えていた。大学に入る頃になって、医者は目の前の人しか助けられないが、世の中の仕組みを考えたら世の中の貧困や経済を変えられるかもしれないと考えた。大学では、国際関係論を専攻した。その頃は、ようやく国際という名のつく学科が出てきた時期であり、その中で国際関係に関する様々な理論を学んだが、惹かれたのが現場で働くことであった。自分が変わらなければいけないと思い、自分

が変わるために、1985年から1年間ソマリアに赴き、JVC、UNHCRのインブプリメンティングパートナーをした。その結果、私はなにもできないと感じた。

その後、国際保健の修士、ソーシャルワーカーの修士をとり、アメリカで2年間ソーシャルワーカーとして働き、JPO試験を受けた。国連職員としての中立性を保ち、国連のミッションに従って仕事をした。6、700人の全職員の80パーセントが家族も連れていけない危険地域である現場で活動していた。

大切なものと喪失感を味わう

まず3分間で、①あなたにとって一番大切なもの、②あなたにとって一番大切なこと、③あなたにとって一番大切な人、を紙に書く。

次に目をつぶって、書いた項目を思い浮かべる。

「その3つがある日突然、奪われたとしたら、どんな感じがしますか?」

「あなたにとって、優先順位の高い大切な価値観はなんですか?」

参加者の回答例：安心感、人間が楽しく暮らせる世界、愛

難民の人達は自分の国を追われた人。彼らの感情に少しでも近いものを感じるとすれば、今日を閉じて感じたような喪失感だ。

東日本大震災

地震が起きた際、京都にも避難してくると思い、準備をしていたが避難者はいなかった。原発に関する情報を流したら、不必要に原発を怖くする情報を流しているからやめてくれと言われた。現地の人はずなぜ命が危ないのに逃げないのだろうと不思議に感じる。

休暇をとり、NPO「パレスチナ子どもキャンペーン」の一員として、岩手県の大槌町でボランティアをした。大槌では13mの津波と火災で町役場の人々が亡くなってしまい、自治体の力を持っていた人がいなかった。

私が支援をしていたケニアの難民キャンプは、45,000人の難民キャンプにフィールドオフィサー1人という状況であり、大槌町は中規模キャンプの運営にあてはまる。人道支援のノウハウを、被災した子ども達の救済に活かせるのではないかと考え、子どもの支援のニーズ調査のために入ったが、避難所で物資が必要なところへ流れていないのを目の当たりにし、物流援助をしようと考えた。事業計画書、予算書を作成し、JPFから資金をもらい、(震災以降57億円)9月まで活動期間を延ばした。現場では、ボランティアを呼ぶのではなく、有償ボランティアとして仕事のない現地の人に働いてもらった。

モザンビーク

モザンビークのキャンプでは、キャンプに来る前は数字も字も読めなかった人達に教育を行った。数字を扱えるようになると、モノの長さを図ることができる。結果、洋服つくる時、長さを測って精度の高い製品を作れるようになった。難民キャンプにいる人々にとって、避難所生活が嫌な時間ではなく、自分が出来なかった技術を身につけ、自分の国に帰って復興に活かされる場にしたいという思いを持っていた。危機は人間が一番変わるチャンス、危機こそチャンスである。

アフガニスタン・カンダハル

当時アフガニスタンで働く国連職員の中で、唯一の女性だった。そのため、個別訪問ができ、人々の生活を見せてもらえる機会があった。そこには、内戦続きで疲弊する家があった。家が半分に分かれていたり、壁じゅうが弾丸の穴だらけな中でも、タリバンが統治した際の人々の声は、「弾丸が頭の上を通過しないような生活を得ることができてよかった。」と、前向きだった。

当時のアフガニスタンでは、1年間に10回くらい公開処刑が行われた。このことがよく報道では、抑圧の根拠にされていたが、一方のサウジアラビアでは、毎週金曜日が公開処刑の日とされていたにもかかわらず、抑圧のニュースはなかった。

タリバン以外の統治下にあるアフガニスタンを知らないのですが、比べることはできないが、当時は少なくとも平和だった。みんなタリバンに対して嫌な気持ちをもっていたが、20年以上続いた戦火が収まって、家族と過ごせる時間を楽しんでいる事に対しては、本当に感謝をしていた。

危機意識と隣り合わせ

私はいつも緊急状態にいる。何時ものが焼かれて逃げなきゃいけない状態になるかわからない。いつ何があってもおかしくない、という危機感や勘が身についている。難民キャンプで、食料配給で並んでいた列で争いが起きたことがある。難民キャンプの食糧配給は、すべてが終わるのに4日間かかる。難民が弓と矢をもち、警察も出動して大変な事態になった。急にそういう事態が起きた時には、これまでの自分の経験とか感覚で対処しなければならない。日本の大学で勉強していても、4万人をどうやってマネジメントするか、緊急

事態にどう対処するかは教えてくれない。身に付けるしかない。こういうときに的確な判断ができないと人が死んでしまう。

そんな危険な状況にいる仕事でも、直接難民の人たちと触れ合って仕事をしていることに誇りをもっている。国連には、背広を着ている人も、戦地帰りのジーンズの人もいて、UNHCR では緊急の時にすぐに現場に飛んでいく人が集まっている。そのため、UNHCR の人たちは、緊急の場合にも冷静な判断をできて、熱い心をもっている。そういう人たちと働けることに誇りを持っている。

学生に伝えたい事

講義のはじめに、大切なものをみんなで考えた。そこでわかったように、本当に大切なものは数少ない。どんな人も最終的にお金をたくさん抱えて死にたいわけじゃない。愛に包まれて死にたいと思っているはず。

今の日本は、そんな世界を作れるだろうか。自分は何ができるのか、自分達に大切なものは何なのか、これから毎日どう生きるのか、という一つ一つの選択が、日本のライフスタイルと世界のライフスタイルを決めているということを、考えてほしい。

セミナーの様子



参加者の感想（一部）

- ・ 日本で出る残飯で、世界中の食糧支援の大半がまかなえるという話が印象的だった。自らの行動を振り返る必要があると感じた
- ・ 国連、難民、人道支援などの言葉を聞くとアフリカなどの発展途上国を想像しますが、今回の震災による避難民がいかに似た状況に置かれているか考えさせられました。また後半の方の、世界の不平等さに関する話も本当に色々と考えさせられました。自分が日本人として情けないと思った部分も多く、今度どのように行動してどのような仕事をしたいか、真剣に考えたいと思いました。とても勉強になりました。どうもありがとうございました。
- ・ 同和問題という身近な関心から始まって、現在のお仕事につながっているのが興味深かったです。その間にある国内／国際という壁についてももう少し聞きたかったです。
- ・ 貴重なお話ありがとうございました。現地での活動や、考え方など本当に興味深かったです。日本の東北地方とアフリカの難民キャンプ、どちらも人々が救いの手を求めているのは一緒で、僕も今は未熟ですが、将来少しでも国際貢献したいと考えています。話を聞く事ももちろんですが、伺ったお話を自分の中で問い直し、深く考えたいと思います。原子力は僕も反対です。国や東電の思惑が見えてきて本当に腹立たしいです。現在でも止まっている火力発電はあるのに、青森の大間にフル MOX の原子力発電が建設されようとしています。色々な真実を周りに話し、自分から行動していこうと思います。「自分にとって何が大切か」を問いかけ、暮らしていきたいと思います。
- ・ UNHCR に入りたいと思いました。
- ・ UNHCR という危機的状況で、かつ現場で働いている方の生の意見をお聞きすることができて良かったと思います。賛同できる意見と賛同できない意見がありましたが、自分の中で再度考え直してみることにします。ありがとうございました。
- ・ 国際協力の経験から見た日本の大震災時の対応についてのお話にははっとさせられました。自分自身も含めて、確かに危機意識が薄いと感じます。今後どうしていけばいいか真剣に考えていかなければいけないと感じました。

- 現地での一次情報に基づいたお話は大変刺激的でした。ありがとうございました。
- “日本”と”アフリカなどの現地”の両方を経験しているゆえの色々な話をありがとうございました。まずお話を聞いて「科学」を楯に今までもこれからも生きていこうと思っている側の人間として当時の考えはどうであれ、結果として起きた事故への後始末を身を切って自らの行動をできていない科学者の先人について申し訳なく思います。原発などについての捉え方や考え方は異なりますが、自分が遠くない将来に同様の立場に立った時には、潔い姿勢でいたいと思いました。千田さんの自分の過去の活動の結果、何もできなかったことについて謝る姿勢は素晴らしいと思います。疑問に思った点は、全てのことを全ての人々が共有する必要があるのか、豊かな環境に生まれた人はその環境に合った生き方をしてもいいと思います。心ある人には共感してもらおうとして。また、日常活動のレベルの違う日本の東北被災地と難民のところではやるべきところも変わってくるのではないのでしょうか？
- 実際に現場で働かされていたからこそ、経験したことについての話やメッセージなど興味深い内容が多くあった。UNHCRのスタッフとしてアフリカ等で活動した話をもう少し詳しく聞きたかった。
- 文化の多様性を受け入れる日本の体質がこれから求められることを強く思います。いかに困難さが伴っても、そのビジョンを持って生きるだけで少しは変わるのではないのでしょうか。使って世界のために何ができるか考えてみます。
- 日本での災害と関連して、「避難してきた被災者を単に被災者のままでいさせてはいけない」という事を再確認した。本専攻では、学生が自主的に東北の震災に対してボランティア団体を立ち上げたが、今後の活動計画として、被災者のお母さん方などに炊き出しを有償でしてもらう方向で議論を進めていた。今回の講演を聞いて、この方向性で間違っていないということを確認できた。緊急時に的確な判断を下せるようになるためには、現場感覚を養う必要があるのだという事を実感した。
- 「国連の現場で働く」ということが具体的にイメージできました。実際に自分の命も狙われる状況の中で働くのは、相当な覚悟が必要だと感じました。お金を持っている人のところにお金が集まるシステムを脱出するには「共存力」ということを考えていかない

といけないと思いました。その「共存」とは、人と環境や、人と人や国と国など様々な形があると思いました。私は政府や東電が発するあいまいな情報を受けて、日本人は“怒らない”のではなく、“怒ってもその声が届かない”のだと思います。よって国民の声をまとめてその声を多くの人に“発信して伝える”システムが必要だと思います。

第28回国際協力セミナー運営委員
三富規容子（企画）・戎勇樹・遠藤百合子
岡本雄亮・菊地真理子・高橋雪子・水野裕

本議事録に含まれる情報は、本講演における講師の演説から引用したものであり、情報の正確性などについて保証するものではありません。また、本議事録の内容や参加者の感想は、東京大学の総意に基づくものではありません。